

『青こだま』二〇〇〇年刊

黙もたを光に天地均しの紙漉き女
甌穴にまなじりのなき寒さかな
やはらかき光体であり夢の田螺
肉感を削ぎたる野火の走りけり
天球の罅やバイソンの口やさし
ついてくる水色の蛾や佐渡の浜
ビッグバン大向日葵が首振れば
天抜けて散乱したるたうがらし
冷まじや月あれば月の抜けあと
荒縄の結び目ほどの自我冷ゆる
肉体を見下ろす晩秋の壁いくつ

枯蓮や皮下走る血の圧されつつ
アンフロアの哭礼のごとつくしんぼ
大葦原焼くかげろふのわたりけり
遊びたくなつて水母であるたましひ
片虹や首の根ふかくしめりをり
詩吐うたいて暑隠り文琴八束居士
春の雪浮子あば繩なについてゐること
ひかる虚の上に虚のある滝ざくら
仮幻忌や蓮あらしの青こだま
向日葵や知恵洪水をなして過ぐ
晩夏なる空そら木返きしや流人墓地
涼しさや佐渡の底から聳たつ老樹
天柱に四方のくちなは吸はれ秋